

## 書評

**Abhijit Banerjee and Esther Duflo, 2011,  
*Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global  
Poverty*, New York: PublicAffairs, pp. xi+303.**

小浜裕久

静岡県立大学教授

どんな本かな、とお思いなら、何しろこの本の website (<http://pooreconomics.com/>) があるので、それを眺めて下さい。本をパラパラ眺めれば、その平易な記述から、一般の読者を想定した本だという事が分かる。「A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty」という副題も魅力的だ。しかし、評者が不勉強なせいかもしれないが、どこが「A Radical Rethinking」なのかが分らない。

本書の序文に「貧しい人たちは、豊かな人々と同じく、合理的に行動する」とか「貧しい人たちは、死なないために、優れたエコノミストでなくてはならない」とあって、この指摘それ自体大切なことだが、「貧しい人たちは合理的」といっても、50年前のシュルツの研究で、あるいはシュティグリッツのケニヤの論文で「常識」だ。開発経済学や貧困問題をきちんと勉強した読者にとって、目新しい事ではない<sup>1</sup>。

この本は、膨大なミクロの研究<sup>2</sup>に基づいた途上国の貧困問題に対する啓蒙書<sup>3</sup>だ。貧困問題に関心があれば、あまり基礎知識がなくても楽しめる。そう言う意味で、*Bottom Billion* (Collier 2007) と同じカテゴリーの本と言えるだろう。貧困問題に関心の学生がいるので、ゼミの教材にして、読み終わったところだ。生意気な四年生は、「これなら寝っ転がって読める」と言う<sup>4</sup>。

---

<sup>1</sup> 開発経済学の代表的教科書である Hayami and Godo (2005)、Todaro and Smith (2011) などをきちんと読んでいれば、さらに貧困問題の優れた入門書である Banerjee, Bénabou, and Mookherjee (2006) を読んでいれば、「目新しい事」ではないだろう。

<sup>2</sup> 本書の注にある関連論文を見れば、こんなにも研究の蓄積があるのかと圧倒される（不勉強な評者ですみません）。著者たちが所属する MIT の The Abdul Latif Jameel Poverty Action Lab (J-PAL) の website (<http://www.povertyactionlab.org/>) でも多くの論文をとることが出来る。

<sup>3</sup> 大学教授の中には、その本は、「一般書」？それとも「専門書」？などと言う輩がいるが、評者にはその区別が分からない。二分法をしたいなら、本は、「いい本」と「くだらん本」の2種類だろう。昔、谷沢永一が「アホバカマヌケ大学紀要」と言ったが、「専門書」と言われる本の中には、「くだらん本」が結構ある。

<sup>4</sup> 自分のゼミの教材を読むスピードが、世の中の平均と比べてどうなのかは知らないが、この本の場合、3回で読み終わった。彼らは、開発経済学のいくつかの教科書は読んで

Banerjee と Duflo だから、方法論から言うと、RCTs (randomized control trials) だ。RCTs は、乱暴に言えば、薬の治験で使われてきた方法を開発ミクロに応用した研究手法と言えるだろう。RCTs による開発ミクロの論文は読んで楽しいが、評者は、余り趣味ではない。本書でも引用されているが (p. 236)、ビル・イースタリーが言うように、RCTs による開発ミクロの研究では、「良い制度とはなにか」「良いマクロ経済政策とはなにか」といった大事な問題に答えを出す事は出来ないからだ。開発のマクロとミクロの関係について論じたものとしては、Rodrik (2009) が評者の趣味に合う。

第8章のタイトルは、「Saving Brick by Brick」である。ゼミ生に聞いても、途上国の経験がある学生は「作りかけの家」を理解出来るが、途上国に行った事がない学生には理解出来ないようだ<sup>5</sup>。貧しい人々の行動を理解しようと、経済学者たちは、心理学者、脳科学者とも協力して研究が進められていることも紹介されていて、「貧困問題の理解」に心強い (p. 195) <sup>6</sup>。

「ミクロの分析が蓄積されると、政策に大きな違いが出てくる (p. 268)」と著者は言う。その通りで、貧困のミクロ分析の蓄積が重要な事は論を俟たない。しかし、ミクロ分析の蓄積だけでは、「大きな問題」に答えを出す事は出来ない。著者もはっきり書いているように、ミクロのアプローチでは援助が貧困問題の解決に有効かどうかの答えを出す事は出来ない。個別の援助プロジェクトが有効だったかどうかの答えが出せるだけだ (pp. 4-5)。RCTs でなくとも、ミクロのケース・スタディから大きな政策的示唆を得る事が出来る。例えば、「緑の革命が農村所得格差を拡大するかどうか」という大問題に関する Hayami and Kikuchi (1981) のジャワの2つの農村の比較研究は、「ノーベル賞級」の研究だと思う<sup>7</sup>。

ミクロの議論にあまり関心がないなら、1章 (Think Again, Again) と10章 (Policies,

---

いて、貧困問題の基本的文献も読んでいます。

<sup>5</sup> 小浜ゼミの学生は、「類は友を呼ぶ」かどうか知らないが、イギリスのNGOでモザンビークの田舎に何ヶ月もいたのもいれば、ユヌスに直接 e-mail して、グラミン銀行でインターンをしていた学生もいた。

<sup>6</sup> どんな研究があるかと電子ジャーナルで8章注7の *Science* 文献 ("Separate Neural Systems Value Immediate and Delayed Monetary Rewards") を探したところ、引用頁が違っていた。「421-423」とあるが、正しくは「503-507」。

<sup>7</sup> この研究以前の開発経済学や農業経済学の「常識」は、緑の革命の導入で村の所得分配は悪化するというものであった。速水・菊池の研究はジャワで農業生産や緑の革命の導入時期など同じような環境の2つの村の比較研究で、一つの村では所得分配は悪化した。他の村では悪化しなかった、というものであった。やり方次第で、緑の革命の導入は村の所得分配を悪化させない、というこのケース・スタディの政策的意味はきわめて大きい。Hayami and Godo (2005, pp. 217-223) にも、この研究は紹介されている。

Politics) を読むのがいいかもしれない。10 章前半の「制度に関する議論」は面白かった。

#### 文献

- Banerjee, Abhijit Vinayak, Roland Bénabou, and Dilip Mookherjee eds. *Understanding Poverty*. New York: Oxford University Press, 2006.
- Collier, Paul. *The Bottom Billion: Why the Poorest Countries Are Failing and What Can Be Done About It*. Oxford University Press, 2007.
- Hayami, Yujiro and Yoshihisa Godo. *Development Economics: From Poverty to the Wealth of Nations*, Third Edition. Oxford: Oxford University Press, 2005.
- Hayami, Yujiro and Masao Kikuchi. *Asian Village Economy at Crossroad*. Tokyo: University of Tokyo Press, 1981 and Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1982.
- Rodrik, Dani. “New Development Economics: We Shall Experiment, but How Shall We Learn?” In Jessica Cohen and William Easterly eds. *What Works in Development? Thinking Big and Thinking Small*, Brookings Institution, 2009.
- Todaro, Michael P. and Stephen C. Smith. *Economic Development*, 11<sup>th</sup> Ed. Harlow, England: Addison-Wesley, 2011.